

2020年5月17日 復活節第六主日・要約

(ヨハネ 14:15-21)

司教 ミカエル松浦悟郎

今日、み言葉を聴きながら私が受け取ったメッセージの中から二つのことをお話したいと思います。

一つは、福音の広がりほどな力も止めることはできないということです。

迫害などで福音を妨げようと人間が力を加えても、それを止めることはできない。広がり続けるということです。日本の表現に「蜘蛛の子を散らす」ということわざがあります。例えば、子供たちがいたずらをしていて叱ると、ちりぢりになって一斉に逃げ出す様子などです。実際に、動画で見たことがあります。親蜘蛛をたたいたら、そのお腹から1000匹もの小さな蜘蛛の子が散らばっていくのです。

イエスの教えは広がっていきましたが、イエスのことをよく思わない人々はイエスの活動を止めようとして最終的には殺します。しかし、それで終わらなかった。その教えはイエスの復活によって一気に広がっていききました。その後も、キリスト教の教えは広がっていくのですが、さらに迫害が起こります。イエスの教えは伝統的なユダヤ教の人たちや政治権力を持つ側（ローマ帝国）との軋轢を起こしていったのです。しかし、同じように福音は広がり続けます。第一朗読では、フィリポがサマリアの人々に宣教し、人々に喜びをもって受け入れられたので、更にペトロとヨハネが応援に駆け付けるという場面です。フィリポがサマリアに行ったのは、エルサレムで迫害が起こったからでした。実はパウロも同じように宣教するたびに起こる迫害から逃れることによって、むしろ、他の地域へと信仰が一気に広がっていききました。

日本でも長い厳しい迫害がありました。そのため、キリスト教は途絶えたのではないかとさえ言われるほどでした。ただ、初代教会のように数として広がらず激減したわけですが、潜伏キリシタン一人一人と共同体の中に深く浸透していくという意味では広がっていったとも言えます。司祭たちがいなくなっただけで、何と230年間の長きにわたってしっかりと受け継がれていったのですから。信仰が深く浸透していたことは、明治になってからの弾圧でも同じように多くの信者が殉教していったことを見ればわかります。

このように、初代教会の迫害では福音はむしろ横に広がっていったとすると、日本の迫害では、深さという縦の深まりで浸透していったと言えるでしょう。こうしたことは、福音の広がりや深まりを誰も止めることはできないことを表しています。

今、私たちは約2か月、ミサのために教会に行くことができていません。この状態は私たちの信仰を弱めるものではなく、制限されて広がり生まれなくても、むしろ信仰が深くしみとおり、これからの福音を伝える力となることもできるし、そう信じています。

もう一つのことは、どんな状況にあっても信仰が続くとしたら、そこに福音という「希望」があり、その希望によって「待つ」ことができるということです。

イエスは、自分の身に起こる受難の 때가迫りつつある中で、不安に思っている弟子たちに愛を持って語り掛けるのです。それはイエスの最後の晩さんの中の告別の説教と呼ばれているところです。弟子たちは漠然とでもイエスの身に何か大変なことが起こるのではと不安に思っている状況の中でイエスの言葉を耳にします。今日の福音ではイエスは、特に弁護者である聖霊について予告しています。もちろん、弟子たちは、聖霊が何を意味するのかはその時にはよく分からなかったと思います。しかし、イエスの言葉できっと心に残ったことがあったと思います。もし、私がある状況の中でイエスの言葉を聞いたとしたら、聖霊そのものの意味が分からなくても、「(父が弁護者を遣わして)永遠にあなたがたと一緒にいるように」という言葉や、「あなたたちを決して見捨てない(みなしごにはしない)」という言葉は心に残ったと思います。弟子たちも、その後でイエスが捕らわれ暗闇に覆われた時この言葉を思い出し、それがはっきりした希望とはならなくても、何かを待つ心を支えたのではないかと思います。実際、イエスの死後、二人の弟子たちが失望してエマオへ帰っていく途中、ずっと話していたことはイエスについてでした。もしかしたら、「イエスは死んでしまったのに、あの時、私たちを一人にはしないと云ったのはどういうことだろうか」など、心に残っている言葉を思い返していたのかもしれませんが。「このまま終わらないのでは、何かある」と感じて踏みとどませるものがあつたとしたら、それも一つの希望の形でしょう。

では、先ほど少し触れた「潜伏キリシタン」たちにとってはどんな希望があつたのでしょうか。まさに迫害によって次々と殺され、宣教師たちが誰もいなくなるというその暗黒の時に、彼らが信仰を保ち伝え続けられたことの一つに、バスチアンの予言があつたと思います。バスチアンは日本人の伝道師ですが、最終的には殉教します。彼が残した予言は4つありますが、まとめて言うと、「7代たつと黒船にのって神父が来る、そしていつでも告白ができ、公に信仰できる日がくる」ということです。当時のキリシタンたちが、200年以上にわたって信仰を受け継ぎ、その日を待ち続けることが出来たのは、そこに希望があつたからだと思います。希望があれば、人はどんな状態でも待ち続けることはできるのです。

信仰とは、希望を捨てずに何かを待つということとつながっています。今日のペトロの手紙の中にも、「あなたがたの抱いている希望について…いつでも弁明できるように備えておきなさい」とあります。人生の中で、待つことがあるから希望し生きていけるとも言えます。神さまが良いものを与えて下さらないはずはないという信頼があるかどうかです。それがあれば、希望をもって待つことができるのです。今日のみ言葉から、福音の広がり、深まりをこの世のいかなる力もこれを止めることはできないということ、そして、その力を信じ、希望して待ち続ける信仰を確かなものになりたいと思います。そして、そのことを今日イエスが約束してくださった聖霊が私たちの中に実現してくださいよう祈りましょう。